

GA文庫ゆうれいなんか見えない！ 第4巻 ドラマCD付き限定版  
よりよといっしょ！ 完成台本

◎登場人物

鞍馬 依・・・ 田村ゆかり

■第壹節『おはようございます！』

○敦志のアパート（朝）

庭が森のようになってるお屋敷の、お隣にある古いアパートの一室。  
時間は6時頃。

敦志（先輩）は布団で寝ている。

依は早起きして台所で朝食を作り、時間になったので起こしに来た。

依 「おはようございます、先輩、起きてますか？」

（敦志 「すや……すや……」）

依 「あれ？ まだ寝てるんですか？ もう朝ですよ、起きてください」

依 「せくんばい、起きましようよ」

依 「（寝ている敦志の背中を揺らしながら）ゆさゆさ……ゆさゆさ……」

依 「もう、起きないと上に乗っちゃいますよ？ 乗っちゃいますからね？」

依 「——えいっ。ほらほら、早く起きてください。そうしないと、どいて

あげませんからね」

依 「起つきて、起つきて、起つきて……」

敦志が目を覚ます。

依 「あ、やっと起きましたね。おはようございます！」

敦志は寝ぼけていて返事しない。

依 「うふふ……まだ眠そうですね？ わたしのことわかりますか？」

（敦志 「ん……そりゃ、もちろん。依ちゃんだよ」）

依 「はい、依です。今日も一日、がんばりましょうね」

(敦志) 「ぐう……」

依 「——あつ、二度寝なんてしたらダメですよ？ ……遅刻しちゃいますー！」

依 「早寝早起き病知らず」と言いますからね。お顔を洗ってきてください。ごはん、もうできてますから」

(敦志) 「……わかった、わかった」

顔を洗って戻ってくる敦志。依は朝食の準備をして待っている。

依 「実は、ちよつと早起きして、目玉焼きを作ってみたんです。

えへへ……卵、6個のうち1個はちゃんと割れるようになったんですよ。綺麗にできたから食べてもらいたくて。どうぞどうぞ」

(敦志) 「おお、すごいね。でも、他の5個はどこへ？ その後ろにあるやつはなに？」

依 「え!? う、後ろにあるの……ですか？ あ、これはダメです……気にしないでください。あ、見たらダメです。あ……」

依が隠そうとするが、長身の敦志は、ひょいと覗きこんでしまう。

依の後ろには、失敗した目玉焼きを乗せた皿がある。見られてしまった依は恥ずかしがる。

依 「——う……、これは、ちよつとコゲちゃいまして……こっちはわたしが食べますから、先輩は、ちゃんとできた目玉焼きを食べてくださいね」

(敦志) 「食べるって言っても……もうコゲじゃなくて炭だし……二人でこっちを食べようよ。俺は白いとこだけでいいから」

依 「え？ 黄味のところがくれるんですか？ それ、目玉焼きの一番美味しいところじゃないですか、ダメですよ」

(敦志) 「いいから、いいから」

依 「どうしても、ですか？ じゃあ、半分こしましょう……うふふ、やっぱり先輩は優しいです」

両手を合わせて。

依 「それでは——いただきます」

(敦志) 「いただきます」

依 「はむ、はむ……もぐもぐ……んふふ……」

依 「あ……ほっぺにご飯粒がついてますよ？ ちょっと動かないでくださいね……はい、取れました。はむ」  
依 「うふふ、ごちそうさまです」

朝食が終わって。

依 「——そうそう、今日は体育があるんですけど、わたし、最近スパッツを家から穿いて行ってるんですよ」  
依 「刹ちゃんに教えてもらったんです——先に穿いておくと着替えのとき早いって」

依 「こんなふうには、スカートの下に穿いてですね——あれ？」

スカートをまくって見せるも、スパッツではなく下着だった。

依は下着を見せることに大した抵抗はないほど子供だが、失敗は恥ずかしいことなので照れ笑いする。

依 「……あ、用意しただけで、まだ穿いてませんでした！ あはは……」  
依 「えっと、これですこれです。今、穿いちゃいますね……んっ」  
依 「——と、もうこんな時間ですね！ あとはランドセル、しよって……んしよ」

スカートがランドセルにひっかかってめくれてしまう。

それに気付いた敦志が赤面しつつ。

（敦志 「依ちゃん、スカートが！」）

依 「えっ、スカート？ スカートがどうかしましたか？ 後ろが、ひっかかって、めくれてる？ あっ、ランドセルに!？」

手違いでスカートめくれたまま町を歩くのは恥ずかしい。

もう一度、照れ笑いする依。

依 「あはは……直しました、大丈夫です！」  
依 「さあ、行きましょう！」

気を取り直して、しっかりした掛け声と共に、二人して学校に向かう。

■第弐節『おかえりなさいませ！』

○学校の校門（夕方）

高等部の授業が終わって帰宅する敦志。  
学校の校門のところに、依が待っているのを見つけた。

依 「あ、先輩！ 一緒に帰りましょう！」

（敦志 「依ちゃん！ ずっと待ってたの!？」）

依 「え？ ずっと校門で待ってたのだったか？ いえいえ、そんなには……  
ただ、ここに居れば、一緒に帰れるかなって思いました——会えてよ  
かったです」

（敦志 「俺も、待っていてくれて、うれしいよ……」）

依 「うふふ……お買い物して帰りましょう」

依 「こんなふう二人だけで一緒に帰るの、ひさしぶりですね」

帰りがけにデパートで買い物をしている二人。  
だいたい買い終わったところで、ケーキコーナーを通りかかる。

依 「——ニンジンに、お肉、と……お夕飯のぶんはこれでいいとして……」

依 「あ……このショートケーキ美味しそう……」

依 「じー……」

（敦志 「依ちゃん、ケーキ、食べたいの?」）

依 「え!？ あ、いえ、べつに食べたいてわけじゃ……美味しそうだなあ、  
とは思いましたけど、ちょっと見てただけで——」

（敦志 「いいよ、買ってあげる」）

依 「え？ 買ってくれるんですか!? ホントにいいんですか？ あはっ、  
ありがとうございます！」

依 「♪（鼻歌）」

ごきげんになって、鼻歌を歌いながら帰る依だった。  
そして、敦志のアパートに戻ってくる。

依 「——ふー、ようやくおうちに着きましたね。商店街に寄ったから、  
すこし遅くなっちゃいましたけど……」

依 「あ、そうだ……ちよっとだけ待ってもらえませんか？ わたし、  
先に入らせてもらいたいです」

軽いイタズラ的な思いつき。  
楽しい気持ちあまり出さないようにしつつ、お願いする依。

依 (敦志) 「ああ、かまわないけど?」

依 「いいですか? じゃあ、3つ数えてから、入ってきてくださいね」

依 (敦志) 「うん……それ、なにかの儀式?」

依 「え? なにかの儀式かって? そうですね、そのようなものです……  
では——」

敦志はドアを開ける。

依 「お帰りなさいませ、先輩。ごはんにしますか? それとも、おフロに

しますか? ——なんて、一度、言ってみたかったです。うふふふ  
……びっくりしましたか?」

依 (敦志) 「う、うん……びっくりした。まあ、ほんとは、あと1つあるはずだけ  
どね——つて、小学生に何言ってるんだ、俺」

依 「え? ごはんと、お風呂と、本当はもうひとつあるんですか? じゃあ、  
今度、フィオナさんに聞いておきますね」

依 (敦志) 「え……それは…… (俺がぶち殺されるんじゃない?)」

冷や汗を垂らす敦志だが、気遣い派だけどマイペースな依は、どんどん  
話を進めていく。

依 「——それで今日は、先にごはんでもいいですか?」

依 (敦志) 「うん。お腹減っちゃったよ」

依 「はい、すぐ準備します」

■第参節『晩ご飯です！』

○アパートの一室（夕方）

こたつテーブルの上に、料理をならべている。ビーフシチューとライス。

依 「いただきます」

依 「えへへ……今日は、お肉が食べたかったって言ってましたから、ビーフシチューにしてみました！ 美味しいそうなニオイがしませんか？」

（敦志 「ああ……ほんと、おいしそうだね」

依 「前に、甘口のカレーを作ったら、ぜんぜん食べてもらえませんでしたから……うう」

（敦志 「あれは、甘くて……ルーより砂糖のほうが多かったし……」

依 「えっ？ あー、まあ、そうですね。ルーより砂糖が多いのは、カレーじゃないですよね……（しゅくん）だって、わたし、あのくらい甘くしないと食べられないですよ——甘いのは好きですけど、辛いのは苦手ですから。ううう……」

依 「あ、でもでも、今日は大丈夫です！ とっても自信作です——食べてみてください」

依 「はい、あーん——」

（敦志 「な、なんか恥ずかしいな……ぱく……熱ッ」

驚いて。

依 「あ!? 熱かったですか？ それじゃ、ふうふうしますね。ふうふう、

ふうふう（ペろ）うん、ちょうどいいです」

依 「改めまして、あーん——」

（敦志 「ぱく」

依 「どうですか？ うまくできてますか？」

（敦志 「うん！ 美味しいよ！」

依 「うふふ、美味しかったなら良かったです」

（敦志 「もう一口、いい？」

依 「え？ もう一口ですか？ いいですよ……ふうふう（ペろ）うん……あーん」

（敦志 「ぱく」

依 「……あはっ、なんだか、ちよっぴり恥ずかしいですね」

依 「でも、作ったごはんを美味しくするように食べてもらえると……胸のあたりが、ほわんつてしちゃいます……」

依 「わたし、あんまり褒められたことないですし……それに、褒めてくれたのが先輩ですし……なんて。あはっ、なに言ってるんでしょうね〜」

依 食事中。

依 「ケーキ、出しますね——あつ、そういえば！ 今日、学校の家庭科でクッキーを作ったんでした……」

依 「たくさんクッキーあるのに……つい忘れて、ケーキを買ってもらっちゃいました……すみません」

依 「え〜つと、クッキーは明日でもいいですか？」

依 (敦志 「俺はクッキーのがいいなあ……」)

依 「え？ クッキーのほうを食べたいんですか？ でも、ケーキは生菓子ですから今日じゅうに食べないと——」

依 (敦志 「いや、それでも、クッキーがいい。ケーキは依ちゃんが二つとも食べていいから」)

依 「それでも、クッキーがいい？ ケーキは依ちゃんが二つとも食べていいから——つて、そんな……わたしは甘いもの大好きだから、うれしいですけど」

依 「でも、本当にいいんですか？ わたしのクッキーより、お店のケーキのほうが、ぜつつつたいに美味しいですよ？」

依 (敦志 「そんなことないよ」)

依 「そんなことないって言われても……そんなことないことないと思います」

依 (敦志 「そんなことないことないことないから」)

依 「え？ そんなことないことないことない、つて……もういいです、わかりました」

依 苦笑混じりに納得する依。

依 「あの……ありがとうございます、わたし、大好きです」

依 「甘いお菓子、大好きなんですよ、えへへ」

依 ビーフシチューだけでなく、ケーキやらクッキーやらを食べて、すっかりお腹いっぱい。

■第五節『お風呂ですよ！』

○アパートの風呂場（夜）

タイル貼りの風呂。敦志と依が、一緒に向かい合う形で、湯船に浸かる。

依 「はあ〜、いいお湯ですね〜」

依 「お湯にゆつくりとつかることで、心身の疲れが取れますね」

依 「入浴って、禊と通じるものがあると思いませんか？ こうして、裸になって水を浴びるところが……まあ、水ではなく、お湯ですけど……」

（敦志 「そうだね……」

言いつつ赤面してしまう敦志。

依は子供だから、とわかつてはいるものの、照れてしまう。

依 「ん？ 先輩、顔が赤くなってますよ……もしかして、のぼせちゃいましたか？ わたしも、ずっと入っていると、ゆだっちゃいそうです」  
依 「あ、そうだ！ お背中をお流しします。ちゃんとできますよ、まかせてください！ ……やったことは、ないんですけどね……えへへ」

湯船から出る二人。

ばしゃーん、と依が敦志の背中に湯を掛ける。

依 「スポンジに石鹸をつけて……こしゅこしゅこしゅ、と泡立てて……うふふ……じゃあ、いきますよ？」

依 「ごしごし……ごしごし……どうですか？ 気持ちいいですか？」  
（敦志 「うん」

依 「背中、大きいですよね〜」

依 「うふふ……はい、右腕をあげてください。腕も、しっかり洗わないといけないからね」

依 「ごしごし……ごしごし……はい、次は左腕です」  
依 「ごしごし……ごしごし……」

依 「えっと……あとは、お尻とか。前のほうを――」

（敦志 「そ、そこは自分で洗うから大丈夫！」



依 「え？そこは自分で洗うから大丈夫、ですか？そうですか、わかりました」

依 「あの……よろしければ、わたしも、ゴシゴシしてくれませんか？」

（敦志）「ああ、いいけど……」

依 「えへへ……お願いできますか？うれいのです」

依 「あ……髪がジヤマですよ。ちよつと待ってくださいね——んしょ、両手でまとめて——これで、どうですか？」

（敦志）「いいよ。じゃあ、洗うね」

依 「——ん……あはっ、誰かに背中をこすられるのって……んふっ……気持ちいいような、くすぐりたいような……うふふ」

依 「んっ、んう……もつと、強くこすっても、へいきですよ？」

依 「ふう……んん……あ、それくらいが、ちょうどいいです……はふっ……はふ……はふうう」

（敦志）「こんなもんかな……髪も洗おうか」

シャワーを当てる。髪に手をかける。

依 「ん？頭も洗うんですか？わたしの髪、だいぶ長いから大変ですけど、いいんですか？」

（敦志）「いいよ」

依 「じゃあ、お願いします」

依 「んっ……んふっ……髪、人にさわられると、くすぐりたいですよ……うふふ……ひゃん!!」

依 「んっ、んひうっ……ううう……あっ、そ、そこは……ぞくぞくっしてちやいますう、はふう、や、んあっ……!!んんん……み、耳の後ろは、だ、だめですううう」

耳の後ろが弱くて、くすぐったがる依。  
シャワーを当てる水音。

依 「はあ、はあ、はあ……お湯につかってないのに、ポカポカですよ」

依 「はあ、こんなふうに洗いつこしてると、本当の兄妹みたいですよ」

依 「じゃあ、お湯につかって、10かぞえて出ましようか……いーち……にーい……さーん……しーい……ごーお……ろーく……ひーち……

はーち……くーう……じゅーーうう！ふにー、のぼせちゃいました」

■第陸節『おやすみなさい……』

○アパートの一室（夜）

こたつを囲んで、依がドライヤーを使っている。  
敦志は、それを眺めている。

ゴ、というドライヤーの音。

カチン、ウイーン、とスイッチを切って、ドライヤーが静かになる。

依 「ん……髪、やっと乾いたみたいです——わたしの髪、30分くらいドラ

イヤー当ててないと乾かないですからね」

（敦志 「長いと大変だね」

依 「短くしたほうがいいでしょうか？」

（敦志 「長いほうが、かわいいよ」

依 「え？ 長いほうが、かわいい？ か、かわいいですか……あはっ、  
うれしいです」

依 「先輩がそう言うなら、もちろん切りませんよ！ わたし、この髪が  
気に入ってますから！ うふふ……かわいいですか」

依 「ん……もうこんな時間ですね——そろそろ、寝ましょうか」

2人して1つの布団に入る。

依 「あの……わたしが一緒だと、お布団が狭くないですか？」

（敦志 「依ちゃんは小さいから、大丈夫だよ」

依 「え？ 小さいから、大丈夫？ そうですか……よかったです」

依 「わたし、早く大きくなりたいです……けど、今は、ちっちゃくてよか  
ったです……うふふ」

依 「ん……明日もがんばらないといけないから……早く寝ないと、です  
ね」

依 「それじゃ、電気、消します。おやすみなさい」

おやすみ、と言いながら、敦志の寝顔をじっと見つめている。  
視線に気付いて、寝つけない敦志。

「……………」

「じー……」

(敦志) 「な、なに？」

依 「あ、ごめんなさい……気になっちゃいましたか？　なんか、ついつい  
見つめちゃって」

依 「……一緒に寝ると思うと、ドキドキしてきちゃいまして」  
依 「あの……手、つないでもらって、いいですか？」

(敦志) 「いいよ」

布団のなかで、手を繋ぐ。

依 「ふふ、大きな手ですよね。それに、あったかいです」

依 「うふふ……あの……ぎゅっ、てしても……いいですか？」

(敦志) 「ぎゅっ？　いいけど……」

依 「いいんですか？　うれしいです……じゃあ——ぎゅっ」

抱きつく依。敦志は硬直している。

依 「あはっ、先輩の体、すごく大きいです……ん……

眠っちゃうまで……このままで……」

「んく……」

「せんぱい、おやすみ……なさい……」

「……」

「ん……」

「……すー、すー……」

■第漆節『寢息……』  
○アパートの一室(夜)  
一緒に布団で寝ている敦志と依。

依 依 依 依 依 依 依 依 依 依 依 依 依 依 依 依 依 依  
「すー……すー……」  
「んにゅんにゅ……」  
「すー……すー……」  
「うふふ……」  
「すー……すー……」  
「んう……すうふう……」  
「すー……すー……」  
「ダメです……」  
「すんすん……」  
「すー……すー……」  
「はむはむ……んにゅ……」  
「すー……すー……」  
「え……？」  
「すー……すー……」  
「そこは……」  
「すー……すー……」

寝返りを打つ。

依 依 依 依  
「んう……」  
「すー……すー……」  
「あん……せんぱい……」  
「すー……すー……」

……  
おしま